

江戸東京博物館の常設展示「生活革命」と東京の電化生活

松 井 かおる*

目 次

1. はじめに
2. 「電化生活」前史、「生活の変化」
3. 「電化生活」の展示
4. おわりに

キーワード 生活革命 電化生活 三種の神器 現代史展示

1. はじめに

江戸東京博物館（以下、江戸博）の常設展示は、江戸幕府の初代将軍徳川家康が江戸に入府した1590年（天正18）から初の東京オリンピック開催年である1964年（昭和39）までの東京の暮らしと文化を中心に構成している。エントランスの日本橋（再現模型）を渡ると、左側には芝居小屋中村座のファサード（再現模型）を中心とした江戸ゾーン、右側には明治期の朝野新聞社のファサード（再現模型）を中心とする東京ゾーンが広がっており、それぞれ住宅の再現模型や盛り場のミニチュア模型等が展示され、展示ケースには時代やテーマに応じた絵画資料や文書資料、地図、着物、生活道具ほかが陳列されている。

江戸ゾーンはテーマ別、東京ゾーンはほぼ時代を追った展示となっており、後者の最後が「生活革命」コーナーである【口絵29】。戦後の東京の暮らしは昭和30年代から昭和40年代にかけて急激に大きく様変わりした。暮らしの変化は衣食住の全般にわたるものであった。明治以後、若干の改良はあってもこれほど根本的に生活様式が変わったことはなく、この現象は「生活革命」ともいわれた。

江戸博では、開館時(1993年3月)、「生活革命」コーナーにおいて、以下の3つのテーマで展示を行った。

(1) 洋裁学校

戦前の日本では、女性の洋装は子供服や制服以外、一般的ではなかったが、戦時中から戦後にかけて、防空服（モンペなど）の着用が日常化したのをきっかけとして、その後女性の間で洋装への需要が急速に高まった。当時、既製服産業は未発達だったため、注文生産の担い手となる洋裁技術の習得がもてはやされ、洋裁ブームが起こった。都内の洋裁学校もこれに連動して隆盛を極めた。

本テーマの展示にあたっては、当時とくに人気を集めていた文化服装学院とドレスメーカー女学院(現

*東京都江戸東京博物館学芸員

ドレスメーカー学院)のご協力の下、両校卒業生に聞き取り調査を行い、当時の学生カバンや縮小丈で作るジャケット、着物地を用いて製作したワンピースなど、関係資料もご寄贈いただいた。東京の洋裁学校数の変遷(グラフと関連写真)、一人あたりの繊維の消費量(グラフと関連写真)、浴衣地から作った水着姿の女性(写真)のパネルを背景に、関係資料や当時のミシンを展示した。

(2) 電化生活

次章以下で報告する。

(3) 東京オリンピックの時代

1959年(昭和34)、1964年(昭和39)第18回夏季オリンピックの開催地が東京都に決定したのを契機に、東海道新幹線、東京モノレールの開通、首都高速道路の整備、都内主要道路の拡幅といったインフラ整備が行われ、さらに東京湾の埋め立てや港湾施設の建設による都市整備が進み、東京の街の様相は一変した。道路整備に伴ってモータリゼーションが進展し、東京都の自動車の保有台数は1955年(昭和30)の14万台弱から1965年(昭和40)には95万台余、1967年(昭和43)には141万台余と急激に増加した。国産小型自動車の開発などにより、昭和40年代には乗用車も増加し、マイカーがサラリーマンの憧れとなった。

このコーナーでは、東京オリンピックの公式ポスターや各種のグッズ、聖火を運んだ道具、都心の道路大改造を報じたグラフ雑誌のほか、当時マイカーとして人気を博した国産小型自動車「スバル360」を展示した。また、東京の自動車保有台数の変化を示すパネル(グラフ)、完成したばかりの首都高速道路(写真)、過度なモータリゼーションにより発生した大気汚染(光化学スモッグ)を示す写真のパネルも展示した。

このうち、高度経済成長期の「生活革命」をもっとも端的に示す展示は「電化生活」であった。そこで、本稿では「電化生活」の前史を示す「生活の変化」における展示及び「電化生活」の展示を紹介する。

2. 「電化生活」前史、「生活の変化」

東京の一般家庭では、電気はまず明かりのエネルギーとして用いられた。東京電灯株式会社(以下東京電灯、現在の東京電力株式会社)による家庭への電力供給が始まったのは1887年(明治20)である。江戸時代以来、室内照明の主流は燭台(和ろうそく)か行灯(菜種油または魚油に灯心を浸して灯す)で、明治期には行灯より明るく、燃料費も安いという道具の扱いがたやすい石油ランプの需要もひろがったが、いずれも火災の危険性があり、独特のにおいもあった。無臭で安全(火を用いないため、風の影響も受けにくい)であり、点火・点滅も自在な電灯は徐々に需要がたかまった。

【図1】を見ると、東京市の電灯利用数は1905年(明治38)から1913年(大正2)にかけて急速に増大している。この時期、重要な技術革新があり、それによるコストダウンやサービス拡大がその原因で

あった。第一の技術革新として、大容量水力発電所の建設と長距離高圧送電の開始があげられる。東京電力株式会社2002によれば、長距離高圧送電の技術は1890年代からアメリカを中心に実用化が進んだ。1900年代には日本でも各地で試みられたが、東京電灯が山梨県桂川水系を利用して建設した駒橋発電所（15,000kw、駒橋－早稲田間の亘長76kmを電圧55,000Vで送電）の1907年（明治40）12月の竣工によってその水準は飛躍的に引き上げられ、日本における「長距離送電時代」の嚆矢となった。第二は電球の改良である。東京電灯創業時に使用されていた炭素電球は断線しやすく、マンテル付の西洋式ガス灯より照度も低かった。1900年代後半、欧米で開発された金属線（タングステン）電球が日本でも1909年（明治42）以降、GE社と提携した東京電気株式会社（以下、東京電気）によって製造された。炭素電球に比べて消費電力が約3分の1、寿命の長さが4割増しのため、1912年以降急速に普及した。さらに上掲書によれば、東京電灯は1905年（明治38）12月より、屋内の電線設置を事業者負担とし、電線や器具を貸し付ける制を開始し、電灯需要の喚起を図った。また、水力の低廉な電力の大量確保に伴い、1908年（明治41）4月、電灯・電力料金を改訂した。電灯料金が3割から4割値下げされたほか、当時の主流だった定額灯のうち、半夜灯（日没から午前零時まで）は電灯料据え置きで終夜灯に一元化され、需要がさらに伸びた。

西洋式ガス灯は、明治初期には文明開化の象徴として、主要な街路に設置された。1872年（明治5）には横浜市の神奈川県庁前にガス灯が10数基、東京でも銀座煉瓦街の建設に伴い、1874年（明治7）に京橋－金杉橋間に85基のガス灯が灯った。その後、ガス管の埋設も進み、街灯が東京市内各所に設置された。室内灯は電灯に先行して明治10年代から官公庁や劇場、学校等で用いられ、その後東京市内の一般家庭でも使われ始めた。創業時のガス灯は裸火だったが、白熱マンテルの発明により5倍の光力となり、1894年（明治27）より日本にも輸入された。当時電灯事業で用いられていた炭素電球に比べて白熱マンテル付のガス灯は光力が強く、ガス管取付費の事業者負担、ガス器具無料貸付、ガス料金値下げなども行われ、ガス灯は室内灯としても東京市内では需要が伸びた【図2】。

江戸博の分館、江戸東京たてもの園の収蔵建造物のひとつである「仕立屋」（旧所在地：文京区向丘）では、内部を大正期の仕立屋の仕事場と想定した再現展示を行っており、園で唯一の例として、室内灯にガス灯を設置している²⁾。

しかし、金属線電球の登場等により、1914年（大正3）を境に、室内灯におけるガス灯は徐々に姿を消していき、1923年の関東大震災後は需要が途絶えた。その代わりに、ガスは主に竈やコンロなど熱源の利用としての需要が高まった³⁾。【図3、図4】

1920年代前半には東京府の電気使用戸数は70万戸に達した。大正期、電力供給に余裕が生じると、照明以外の電力利用が奨励されるようになった。また、東京市では1924年4月、電気料金を定額制から従量制に切り替えるタイミングで料金を値下げし、電灯の需要が少ない昼間の電力を有効利用するよう促した。1910年代半ばには電気扇風機（以下扇風機）や電気アイロン（以下アイロン）が国産化され、1924年（大正13）にはラジオ受信機が、1930年には電気洗濯機（以下洗濯機）や電気冷蔵庫（以下冷蔵庫）、電気ストーブなどが国産化された。このほか、炭火を用いた暖房器具を電化した電気火鉢、電気あんかなど、日本独自の家庭電化製品も生産され、家庭における室内灯以外の電力需要が広がった。

ゼネラル・エレクトリック社⁴⁾ (以下GE社) のJ・G・ダグラスが行った家電市場調査⁵⁾によれば、1937年(昭和12)における関東地方の家庭電化製品普及台数は、アイロンが約120万台、電気時計約21万台、電気井戸ポンプ約10万台、冷蔵庫約4,700台、電気掃除機(以下掃除機)約3,100台、洗濯機1,590台であった。アイロンは、それ以前使われていた炭火アイロンより温度調節や取り扱いが簡単なため、この時代の電化製品としては例外的に、一般家庭にも普及した。このレポートには扇風機は調査項目に見られないが、1940年(昭和15)発行の『芝浦製作所65年史』によれば、同社の扇風機生産台数が同書の発行年時点で100万台を突破している。三菱電機、富士電機、松下電工、川崎造船所などでもこの時期さかんに製造していた(松井2011)ことを考えると、扇風機も高価ではあるが、冷蔵庫や掃除機、洗濯機に比べれば、当時ある程度は普及していたと考えられる。扇風機の研究者平野聖氏によれば、扇風機はまず1910年代に駅舎、銀行、郵便局、百貨店などの公共施設で利用され、次の段階では、1920年代から1930年代に、改良された台所と洋風の応接間を備えるいわゆる文化住宅に住む「新中間層」(高学歴のサラリーマン)家庭において、応接間で来客向け等に用いられた。大正期には東京市電気局による扇風機のレンタル制度もあったが、1924年、料金制度改定に伴い電気料金が値下げされると、購入の需要も増えた(平野2008)。当時の扇風機の価格は、当館所蔵の「芝浦電気扇 昭和二年[カタログ]」によれば、標準形の12インチが32円、大型の16インチが45円で、高学歴のエリート商社マンの月給が80円の時代、一般庶民にとって扇風機は高嶺の花ではあったが、文化生活を象徴する憧れの対象となっていた。

なお、当時一般家庭では、電気の供給口が電灯のソケットしかない家庭が多かったため、アイロンや扇風機を受電部分がコンセントではなく、ソケットに装着するプラグの製品もみられた(松井2011)。

江戸博の東京ゾーン「モダン東京」コーナーの「生活の変化」と称するスペースでは、壁面に【図3】のパネルを展示し、その前の展示台に、戦前期のアイロン、明治期から昭和10年代までの各種扇風機、同年代の各種電話機、大正末期から昭和10年代の各種ラジオ、同年代の電気蓄音機を含む各種蓄音機、各種電気ストーブ、電気火鉢、電気コンロ、掃除機などを季節ごと、テーマごとに展示している¹⁾。【口絵32】

江戸博は、幕末から昭和期にかけての科学技術史資料のコレクション(赤木コレクション)を所蔵しており、このなかに明治期の扇風機や電話機各種、蓄音機各種、放送開始当時(大正末期)のラジオ、それらのパンフレットや広告などがあり、当該テーマにおける資料展示の中核を担っている⁶⁾。

このほか、1939年(昭和14)、東京電気株式会社と株式会社芝浦製作所の合併により、東京芝浦電気株式会社(現在の株式会社東芝)を設立した山口喜三郎氏の邸宅に保管されていた資料がご遺族から江戸博に寄贈され、収蔵している(山口コレクション)。当該資料の中には、戦前の照明器具や各種扇風機、各種ストーブ、同時代の各種電気コンロ、各種ラジオ、電気蓄音機などがあり、赤木コレクションとともに、開館以来、当該テーマの主要な展示資料となっている。今回、関係資料を【表2】及び【写真1～69】にまとめた。資料の大半は自社製品で、同型が複数含まれる場合があるほか、箱入り未使用のものも数点ある。他社製品の中には、芝浦製作所が1916年(大正5)、量産品として発売した扇風機の手本となったものと思われるGE社製の扇風機や、アメリカの家電メーカー Knapp Monarch社製のサーモスタット付ヒーター等、珍しい製品も含まれている。また、自社のチラシを梱包材に使っているもの

もあり、興味深い。

3. 「電化生活」の展示

戦後、家庭電化製品の生産は進駐軍向けの製品が中心だったが、昭和20年代後半、戦後の経済復興とともに国内需要も回復した。1953年（昭和28）2月には日本放送協会（以下NHK）が、同年8月には日本テレビ放送網株式会社（以下日本テレビ）がテレビの本放送を開始し、この年の1月、国産第一号の白黒テレビが早川電気（のちのシャープ株式会社）から発売された。サラリーマンの平均収入が3万円の時代に、14インチで175,000円と高価だったため、当初は喫茶店や理髪店、食堂などが購入し、客寄せの手段として利用した。日本テレビは都内、近郊53か所に街頭テレビを設置し、人々の関心を呼んだ。とくに「プロレス中継」の番組は大人気で、1954年（昭和29）2月の試合では、新橋駅西口広場の中継放送には2万人の群衆が押し寄せた。またこの年、松下電器は冷蔵庫を発売し（129,000円）、三洋電気は日本初の噴流式洗濯機を発売（28,500円）、「電化元年」とよばれた。

このころから、上記3点（白黒テレビ、冷蔵庫、洗濯機）が「三種の神器」とよばれ、新時代の生活必需品として新聞・雑誌の広告やラジオ、テレビのCMで宣伝され、電化生活のシンボルとされた。当初は高価だった白黒テレビや電気洗濯機の価格は、材料変更によるコストダウンなどで徐々に下がる一方、国民の平均所得は年々上昇する傾向にあった。また割賦販売制度も一般化したため、家庭電化製品は急速に普及し、「家電ブーム」といわれた。

経済企画庁の調査【⁷⁾口絵33】によれば、白黒テレビの普及率は1958年（昭和33）の10.4%から1960年（昭和40）には44.7%、翌1961年には62.5%と急激に上昇し、東京オリンピック開催年の1964年（昭和39）には87.8%に達している。その後、1968年（昭和43）の96.4%をピークに、普及率は下降をたどり、1973年（昭和48）、急上昇を続けるカラーテレビの普及率に追い抜かれる。テレビのカラー放送が1970年（昭和45）ごろ本格化し、その後数年で大量生産によるコストダウンから、カラーテレビが急速に普及するが、その上昇曲線は白黒テレビのものとよく似ていて興味深い。カラーテレビの普及率が99%に達するのは1984年（昭和59）で、それ以後現在に至るまでその数値を保っている。ラジオ（真空管ラジオ）も同様に、普及率のピークはトランジスタラジオの普及率が統計に現れる1954年（昭和29）であり、テレビほど急激ではないが、それから徐々に下降し、深夜放送が本格化する1960年代後半に逆転する。その後、カセットデッキにラジオを内蔵したラジオカセットが主流となり、1990年（平成2）まで引き継がれる。一方、ステレオの普及率は1965年（昭和40）の14.6%から1975年（昭和50）に51.6%と急増し、1985年（昭和60）には73.6%とさらに上昇したが、1992年（平成4）の時点でも横ばいとなっている。これは、1980年代からCDが普及し始めた影響からCDプレーヤーの普及率が上昇したためと考えられる。ちなみに1965年（昭和40）から1975年（昭和50）のラジオカセットとステレオの普及率の推移がほぼ重なっている点も興味深い。

一方、家事労働の負担を軽減した家庭電化製品は、洗濯機と自動式炊飯器である。前者の普及率は1958年（昭和33）の20.2%から1960年には40.6%、1965年（昭和40）には68.5%に達した。後者の普及

率は1958年(昭和33)の20%弱から1965年(昭和40)には50%を超える。1950年代後半から入居が始まった公団住宅(いわゆる団地)に住む中間層サラリーマンの家庭では、生活の合理化を志向する家庭が多く、ある程度設備も整っていたため、1960年(昭和35)における前者の普及率は76%、後者も56%と都内一般家庭の普及率を大幅に上回った。逆に言えば、この時期の家電ブームを牽引していたのは、いわゆる「ダンチ族」(公団住宅の住人)であった。その後、ダンチ族以外の一般家庭にも徐々に需要はたかまり、主婦の家事労働時間は軽減された。NHKの「国民生活時間調査」によれば、成人女性のうち朝5時に起きて家事をしている女性は1960年(昭和35)の14%から1965年(昭和40)には7%に減った。朝の飯炊き作業が自動化されたためと考えられる。全体の家事時間も7時間12分から6時間59分とわずかながら減っているが、睡眠時間はほとんど変わらない。身の回りの用事や交際時間もわずかに増えているほか、テレビの視聴時間が、1時間19分から3時間50分と大きく変化している。

冷蔵庫は、1960年代半ばまでは三種の神器の中でもっとも普及率の上昇が緩慢であった。食品を冷やして貯蔵する冷蔵庫は従来の食生活では必需品とはいえなかった。しかし、1960年代半ばから冷凍庫付の製品が発売されると、冷凍食品やアイスクリームの需要と比例して冷蔵庫の普及率も上昇した。冷凍庫が独立した2ドア冷蔵庫が発売された1965年(昭和40)には普及率は50%を超え、75年(昭和50)には96.7%に達した。掃除機も、従来の畳の間の清掃には適さず、当初は普及しなかったが、公団住宅をさきがけとして板張りの床に絨毯を敷くスタイルの洋間が一般化すると、清掃用具として重宝されるようになった。普及率は1960年(昭和35)の7.7%が1965年(昭和40)には32.2%、68年(昭和43)には53.8%、75年(昭和50)には91.2%に達した。

江戸博の展示「電化生活」では、開館当初から壁面に「電化製品の普及率と価格の変化」パネルや団地のパネル(「団地生活における電化製品の普及率」グラフを含む)を展示し、三種の神器(1950年代後半から60年代前半の白黒テレビ、洗濯機、冷蔵庫)を常時展示している⁸⁾。【口絵31】その他、当時発売されたさまざまな電化製品(掃除機、電気炊飯器、ゆで卵器、ミキサー、トースター、扇風機、電気ストーブ、カラーテレビ、テレビ型ラジオ、トランジスタテレビ、各種ラジオ、コンパクトステレオなど)をテーマごとに展示している(主な資料は【表3】参照。)。ここに展示している資料は、大半が一般の方からご寄贈いただいたもので、使用した方からお話を伺える場合もある。1965年(昭和30)の時点で三種の神器のうちもっとも普及率が低いのは冷蔵庫(東京全世帯13.7%、団地世帯20.5%)だが、ご寄贈いただいたもののうち2点は昭和30年代から平成初期まで使われていた。洗濯機ほど消耗が激しくないとはいえないが、高価なだけに大切に使われてきたことがうかがえる。

その他、日本テレビが本放送開始当時設置した街頭テレビの実物大復元模型を設置し、当時のテレビ受像機に見立てたモニターでは街頭テレビに関する展示映像(当時のニュース、プロレス等スポーツ中継、バラエティ等を編集したもの)を上映している【口絵30】。この模型は、当時日本テレビで街頭テレビを設置した方から話を聞き、写真等の資料提供も受けて、忠実に再現したもので、展示映像の素材も、日本テレビ開局1周年の映像を提供していただいた。来館者がこの展示映像を見る様子が、そのまま街頭テレビの情景再現となることを意図したが、開館後まもなく、このモニターの前にベンチが置かれ、展示の企画者としては残念な思いだった。

2011年（平成23）6月、筆者は数年ぶりに常設展示を所管する係へ異動し、「生活革命」の展示を担当し、このコーナーで特集展示を連続して行った。夏には、戦後の扇風機の関連資料を特集し、秋から冬にかけてはテレビ大集合と題して各種のテレビや関係資料を展示した。【写真70～73】

この年の3月、東日本大震災によって福島県の原子力発電所が操業不能となり、関東地方における電気の供給がままならず、一部地域では計画停電も実施されるなど、電気の有難さを痛感した。「電化生活」の展示にも工夫が必要と感じていたところ、東京電力電気の史料館（休館中）で2003年（平成15）に開催された「第二回夏休み特別展 電気がなかった時代の暮らしと知恵」の図録に掲載されていた図版、「一般家庭で用いる製品と月間電気使用量の移り変わり」が目にとまった。従来はそれほど意識せず、あることが当たり前になっていた電気について、震災後、意識が変化し、節電のため、自宅の契約アンペアを見直そうという社会現象が起こり、その現象は「アンペアダウン」とよばれた。このように消費電力量への関心が高まるなかで、電気エネルギーをほとんど使っていなかった時代と現代との消費電力量の比較を示すこのパネルは、私たちの生活が知らず知らずのうちに電化製品に囲まれ、それらがなくては生きていけなくなっていることに気づく良い材料だと感じ、早速、東京電力に了解を得て、この図版の2011年江戸博版【口絵34】を制作し、「電化生活」コーナーに展示した。パネルは4つの時代を示す。左端の「江戸時代の長屋（江戸ゾーン「町の暮らし」コーナーに設置している再現モデル）」においては電力消費量が0kwhであることは当然だが、二つ目、1943年（昭和18）の「庶民住宅（江戸博東京ゾーンの「空襲と都民」のコーナーにある、空襲直前の下町の生活を再現したモデル）」である。電灯の他はアイロンと昭和10年代から一般化したラジオがある程度で、電力消費量は17.4kwhであった⁹⁾。三つ目は家電ブームが到来した1960年、三種の神器のほか、蛍光灯、自動炊飯器、トースター、掃除機、ステレオを持つ一般家庭を想定したもので、電力消費量は63.6kwhだった。以前よりは格段に電化製品が増えたが、それでも電力消費量は現代の4分の1以下である。右端が現代（2011年）の一般家庭を想定したもので、家の中にカラーテレビ、DVDレコーダー、オーディオ・コンボ、全自動洗濯機、大型冷蔵庫、照明器具、エアコン、掃除機、炊飯器ジャー、湯沸ジャーポット、食器洗浄・乾燥機、電子レンジ、電気カーペット、温水洗浄便座、パソコン、ゲーム機、電磁調理器、電気温水器（給湯器）があると想定した場合、電力消費量は282.7kwhであった。2011年の製品の画像は各メーカーに提供を依頼して作成した。

1970年、2.1%の普及率だった電子レンジは1975年には15.8%、1987年には52.2%、1997年には90%に達した。1970年前後から流通し始めたレトルト食品の普及、1980年代以降の家庭用冷凍食品の普及などが影響しているものと思われる。温水洗浄便座は1992年、14.2%の普及率が統計に現れ、2003年には51.7%、2013年には71.3%に達している。パソコンは1987年に11.7%だった普及率が1990年代末から徐々に上昇し始め、2003年には50.1%、2013年には78%に達して上昇を続けている。1990年代後半から電子メールやインターネットが普及したことから、需要が増加している。カラーテレビは、2005年の統計からブラウン管と薄型（液晶、プラズマ等）に分類され、その割合が2005年では前者が97.4%、後者が11.5%であったが、2013年には前者が19.0%、後者が96.4%に逆転している。その他食器洗い機、DVDレコーダーは2005年から統計に現れ、現在では30%から40%以上の普及率を記録している。

電気事業連合会作成の、1970年（昭和45）から2009年（平成21）までの5年ごとの一世帯当たりの電

力消費量の推移をみると【図5】、1970年の116.8kwhから徐々に上昇し、2000年、2005年と約300kwh前後で推移したが、2009年には283.6kwhに下降している。【口絵34】における2011年の一般家庭を想定した電力消費量もほぼ同量となっている。従来、右肩上がりだった電力消費量が2005年以降下降しているのは、エアコンなど電力消費量が多い製品について、法律によって省エネ化が義務付けられたためと考えられる。今後、下降曲線はどのあたりで下げ止まるのか、推移を見守りたい。

このパネルの製作にあたって、家電ブームの時代にもはやされた電化製品は、高機能化して今や文字通り生活必需品となり、高い普及率を維持している一方、当時は存在しなかった多種多様な電化製品も同様に生活必需品として家庭に取り込まれていることを再認識した。また、電化製品の時代ごとの盛衰は、現代生活を反映するものとなっていて興味深い。

4. おわりに

ここまで、当館で電化製品を展示しているコーナーについて紹介するとともに、東京の市民生活における電化製品とのかかわりを検討した。

筆者が現在勤務している、江戸東京博物館分館の江戸東京たてもの園で2012年（平成24）秋、あるワークショップを行い、大変好評を得た。それは、茅葺きの民家で行った、昔の明かりの体験講座で、各部屋を障子で締め切り、一室では行灯を、次の間では和ろうそくを、その次の間では灯油ランプを灯し、各部屋に浮世絵や地図の複製や雑誌などを置いて、その明るさを体感するというものだった。これらを体験した後、出口の部屋に、20ワット電球の電灯をつけたところ、ふだんより暗いはずの電灯の明かりが明るく感じるといわれるお客様が多かった。この実験的なワークショップにより、電灯以前の明かりは、薄暗いことはもちろん、メンテナンスにも手間がかかり、二酸化炭素排出、火事の危険性なども多分にあることがわかった。電気がない暮らしの体験をすることで、電気の導入が私たちの生活にどれだけのメリットを与えたかを痛感する結果となった。

「生活の変化」や「電化生活」では、各製品の普及率や電力使用量を示すグラフと当時の製品を展示してきたが、個々の製品が家の中でどのように置かれて使われたか、電気をを用いない生活との違いはどこにあるのかといったことは示されていない。これらをどう伝えていくかが今後の課題となる。

開館当時、昭和30年代以降の現代生活をテーマとする公立博物館の常設展示は江戸博の当該コーナーと、同年開館した松戸市立博物館の常盤台団地の再現展示のみであった。「電化生活」の展示の前で、来館された家族が思い出を語られる様子を見かけることも多かったが、当時としてはそれも画期的なことであった。その後、1996年（平成8）には池袋の商業施設（ナムコナンジャタウン）内に昭和30年代の商店街が再現されて話題になり、2005年（平成17）、映画「ALWAYS三丁目の夕日」のヒットをきっかけに、「昭和30年代ブーム」が起こった。江戸博の「電化生活」も昭和を回顧する展示のひとつと受け止められていたのかも知れない。

本稿で紹介した「生活革命」のコーナーは、平成24年度から取り組んでいる常設展示のリニューアルで改修を予定している。平成26年度、改修工事が行われれば、現在の展示はその役割を終え、江戸博の

現代展示も新たなステージへと向かう。

江戸博では首都博物館（北京）、ソウル歴史博物館、瀋陽故宮博物院とアジアにおける都市博物館の国際シンポジウムを、2004年（平成16）以来¹⁰⁾ほぼ毎年、各都市の持ち回りで開催している。2013年（平成25）6月27日、28日の2日間、ソウル歴史博物館に於いて「都市博物館と現代史」をテーマに当該シンポジウムが開催され、筆者は杉谷参事とともに参加した。

瀋陽故宮博物院が1950年代から現代書画作品を収集していたのを例外として、北京首都博物館では2003年（平成15）から、ソウル歴史博物館は2009年（平成21）から、それぞれ現代資料の収集や現代史をテーマとした展示に取り組むようになり、「サーズ（鳥インフルエンザ）展」、「北京オリンピック展」、「明洞物語」、「made in昌信洞」など、調査研究にもとづく魅力的な展示として成果をあげている。筆者もシンポジウムの会場となったソウル歴史博物館の常設展示、企画展示を見学し、縫製工場の扉や窓、機械など、最近まで使われていたものが収集され、効果的に展示されている様子を体感することができた。筆者は20数年前、江戸博の開館にむけて現代資料を収集し、現代史と取り組んだ経験を発表した。開館後20年の間、江戸博では「現代史展示」のテーマとなりうるさまざまな調査研究が行われ、関連の資料収集もすすみ、ノウハウやコレクションは他の都市よりも蓄積されているかも知れないが、それをどのように活用できるかが今後の課題となろう。本稿はこの時の発表資料を加筆、訂正したものである。

【註】

1) 2014年（平成26）3月現在。

2) 1994年（平成6）の公開時から2002年（平成14）3月までは開園時間に日中点灯して公開していたが、解説員常駐廃止により、同年4月以降、点灯していない。2013年11月の特別夜間開館イベント開催時（22日～24日）、期間限定で11年ぶりに点灯し、好評を得た。

3) 東京市外（十五区周辺）や多摩地域ではガス管の敷設が市内のように進まず、室内灯としてのガス灯は普及しなかった。熱源としての利用は、関東大震災後、急速に需要が高まり、ガス管敷設が追い付かない地域ではプロパンガスが用いられた。電気の供給については、横浜との貿易が盛んだった八王子で水車による水力発電で1896年（明治28）には電灯が導入されたのを例外として、鉄道会社等による郊外住宅開発がさかんになる大正期以降、順次電化が進むといった状況であった（天野宏司2002）。

4) ジェネラル・エレクトリック社（以下GE）は東京芝浦電気株式会社の前身のひとつ、東京電気株式会社と1905年（明治38）より、もうひとつの前身、芝浦製作所と1909年（明治42）より提携し、先進の技術を伝えた。

5) 1941年から40年間、東芝の社員であった山田正吾によれば、この調査は、約半年間にわたって日本全国を対象に行われた。3年後に万国博覧会とオリンピック大会の同時開催を控え、機運が盛り上がる日本が、家電製品の市場として、どれくらいの可能性があるかを実証するための調査であった（山田1986）。同書には、地域ごとの内訳が掲載されている（表1）。

6) このコレクションについては、東京都江戸東京博物館調査報告書第19集「江戸のモノづくり 科学技術黎明資料－赤木コレクション」において画像入りの目録形式でまとめている。

7) この図は、開館時に展示していたパネルのデータをシンポジウム発表のために修正したもの。

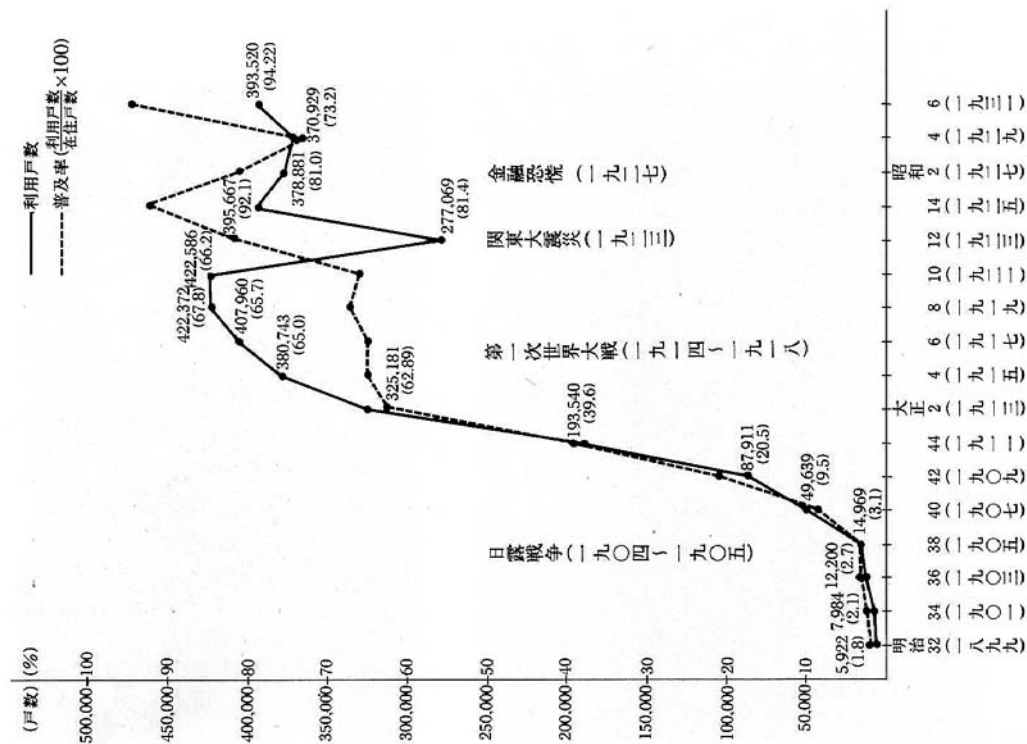
8) 2014年（平成26）3月現在。ただし、白黒テレビについては、江戸博には最も普及したコンソレット型（4本の取り外し可能の脚が附属するタイプ）が収蔵されておらず、時折、個人蔵の資料を借用して展示している。

9) 昭和18年度的一般家庭一軒が電気を使う量。以下、1960年（昭和35年度）、2011年（平成21年度）も同様。

10) 瀋陽故宮博物院は2007年（平成19）から参加。

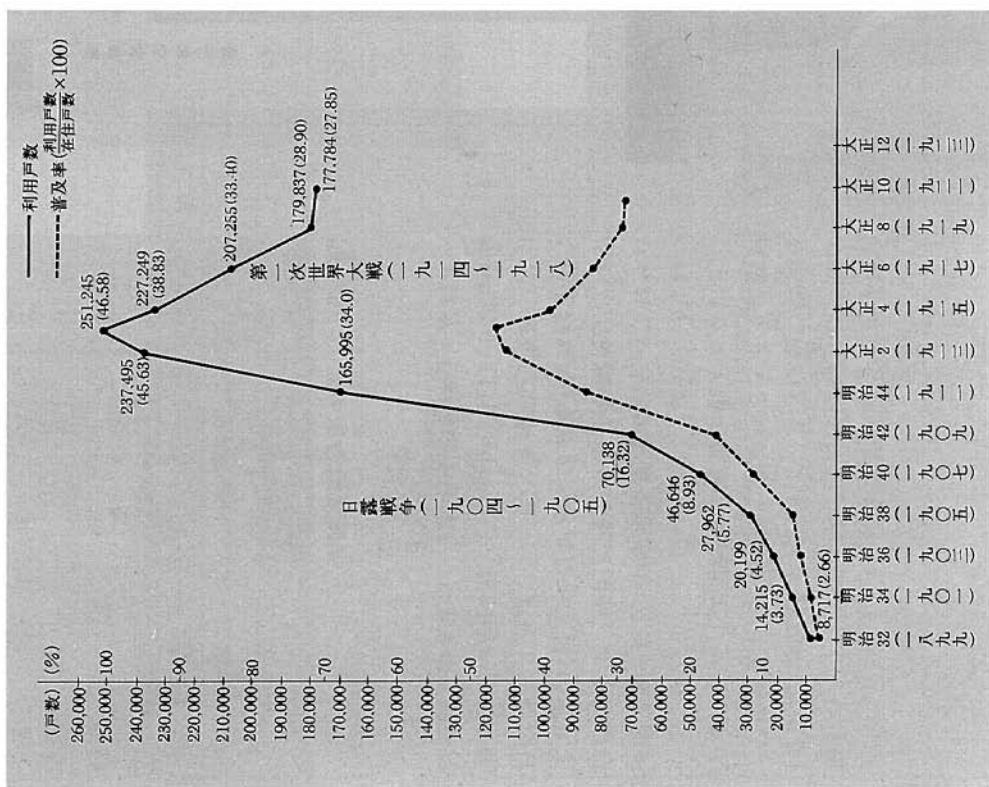
【参考文献】

- ・天野宏司 2002「特集二〇世紀の多摩 ガス・電気・水道」『多摩のあゆみ第100号』財団法人たましん地域文化財団
- ・清水慶一 2007『あこがれの家電時代』河出書房新社
- ・東京芝浦電気株式会社 1940『芝浦製作所65年史』
- ・東京電灯株式会社 1936『東京電灯株式会社開業五十年史』
- ・東京電力株式会社 2002『関東の電気事業と東京電力 電気事業の創始から東京電力50年への軌跡』
- ・東京都江戸東京博物館 1995 特別展『あかりの今昔－光と人の江戸東京史』図録 財団法人江戸東京歴史財団
- ・東京都江戸東京博物館 2007『東京都江戸東京博物館調査報告書第19集「江戸のモノづくり 科学技術黎明資料－赤木コレクション」』財団法人東京都歴史文化財団
- ・東京都江戸東京博物館 2011『図表でみる江戸・東京の世界』東京都江戸東京博物館
- ・中根君郎ほか 1983『ガス灯からオープンまで』鹿島出版会
- ・新田太郎ほか 2003『図説 東京流行生活』河出書房新社
- ・平野 聖 2008「我が国における家庭用電気扇風機のデザインの変遷に関する研究」九州大学芸術工学研究院
- ・松井かおる 2011「当館所蔵の扇風機及び関係資料について」『東京都江戸東京博物館紀要第2号』東京都江戸東京博物館
- ・山田正吾 1986『家電今昔物語』三省堂



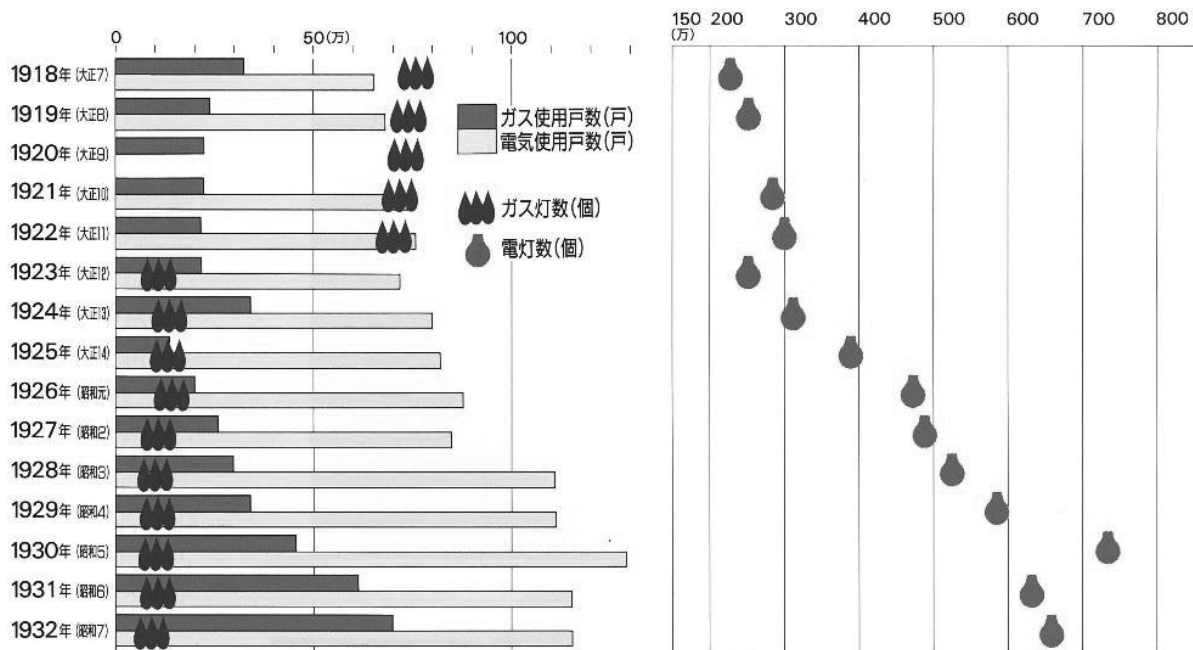
【図1】東京市（十五区）電灯利用数の変遷 江戸東京博物館『あかりの今昔』より

東京市統計年表より作成
 ※普及率については、算出に利用したた在住戸数に推計等が含まれているため、確実なものと言えない部分がある。

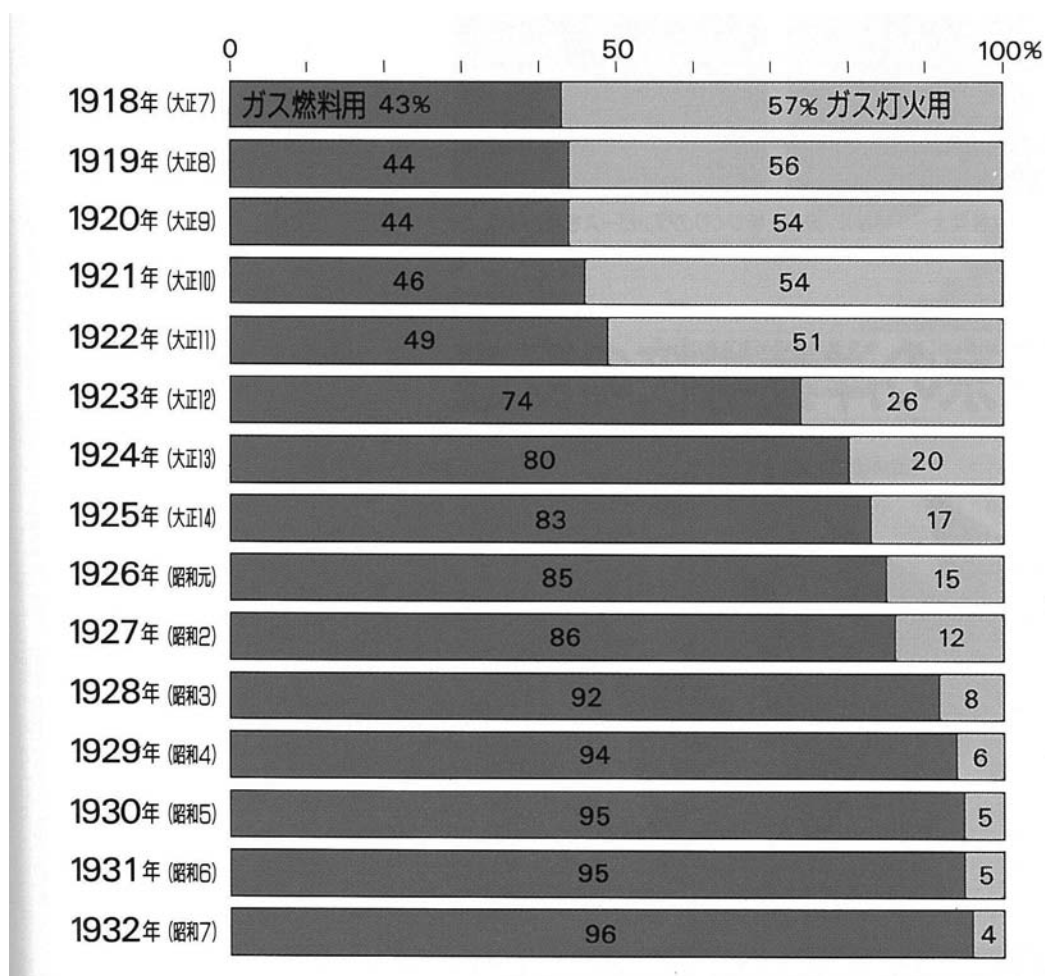


【図2】東京市（十五区）ガス灯利用戸数の変遷 江戸東京博物館『あかりの今昔』より

東京市統計年表より作成
 ※1911年(明治44)以降、ガス利用戸数のうち、灯火用と熱用の区別がなく
 なるため、併用戸数をそのまま利用した。また、普及率については、算出
 に利用したた在住戸数に推計等が含まれているため、確実なものと言えない
 部分がある。



【図3】 東京府におけるガス・電気使用家数とガス灯・電灯数 江戸東京博物館『図表で見る江戸・東京の世界』より



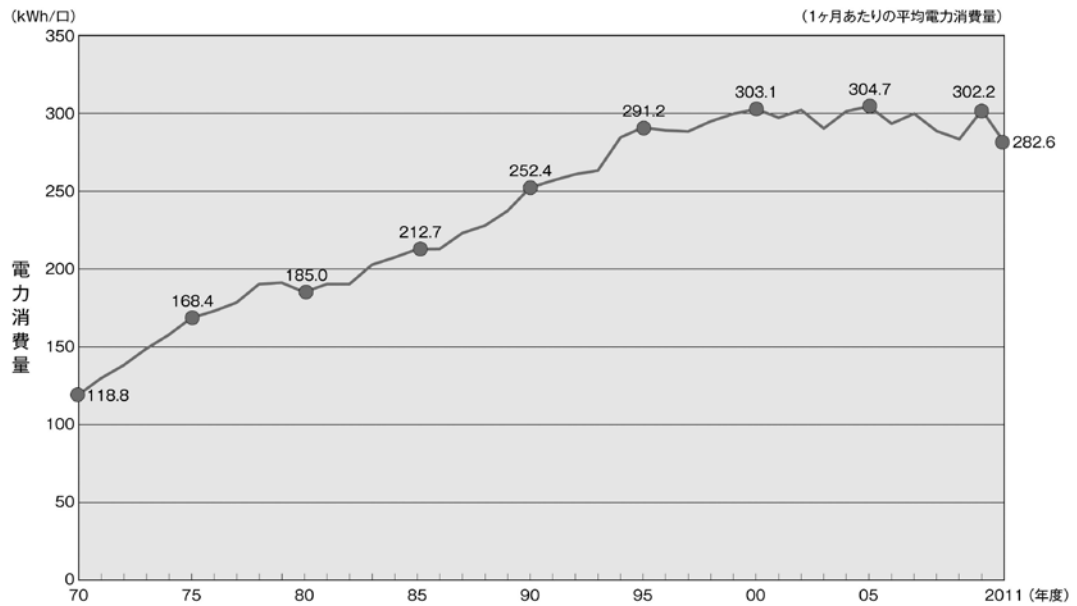
【図4】 ガスの灯火用と燃料用の口数割合 江戸東京博物館『図表で見る江戸・東京の世界』より

【表1】昭和12年の日本の家庭電化製品普及台数 山田正吾『家電今昔物語』より

地区別	関東	中部	関西	九州	その他	計
家庭用電気冷蔵庫	4,700	803	4,100	845	1,767	12,215
洗濯機	1,590	136	1,200	147	124	3,197
掃除機	3,100	910	1,900	520	180	6,610
家庭用ポンプ	100,000	1,150	45,000	1,150	55,000	202,300
アイロン	1,200,000	305,000	1,178,000	318,000	130,000	3,131,000
電気時計	211,000	18,000	125,000	21,000	43,000	418,000
営業用冷凍機	1,130	218	966	91	675	3,080
ルームクーラー	125	9	120	6	僅少	260

J・G・ダグラスが、リサーチのため調査を行った。その他の欄は、満州などの外地の数字である。

一世帯あたりの電力消費量の推移



(注) 数値は9電力会社平均値

【図5】一世帯あたりの電力消費量の推移 電気事業連合会

出典：「原子力・エネルギー」図面集2012 1-2-13

【表2】山口ロレクシヨン家電製品等一覧

No.	写真	資料番号	資料名	メーカー	時代年代	法量	商品名	シリアルNo.	備考
(1) 音響機器									
1	1.63	88010033	携帯式真空管ラジオ	TEC (東京電気)	[1926年]	25.0×41.0×33.0	サイモホンD型携帯用スーパーヘテロダイン		50年史p.446
2	2	88010034	真空管ラジオ	Radio Corporation of America (RCA)	[1928年]	20.0×69.5×22.0	RCA-Radiola18	AR-936	附属スピーカー欠損
3	3	88010029	真空管ラジオ	日本ビクター蓄音機	[1939年]	22.0×48.0×29.8	5球スーパーヘテロダイン	5R-65	雑誌「無線と実験」1939年7月号掲載
4	4	88010036	真空管ラジオ	日本ビクター蓄音機	[1940年]	34.0×50.0×32.0	6球スーパー	6R-70	
5	5	88010030	真空管ラジオ	日本ビクター蓄音機	1946年	23.5×48.0×31.8	Reimei	5R-ST501	
6	6.64	88010032	真空管ラジオ	日本ビクター蓄音機	[1941年]	24.0×45.0×28.0	5球式高周波2段ラジオ	5R-25	50年史p.672
7	7	88010035	真空管ラジオ	東京芝浦電気	[1940年代前半]	22.0×45.0×27.0	5球スーパーヘテロダイン	5108	
8	8	88010670	真空管	東京芝浦電気	昭和前期	13.8×6.0	マツダ真空管 (出力用五極管)	UZ-2A5	ラジオ用真空管、サック入り
9	8	88010671	真空管	東京電気	昭和前期	13.5×6.0	マツダ真空管 (五極管)	UY-247	ラジオ用真空管、サックなし
10	8	88010672	真空管	東京電気	昭和前期	12.5×4.5	マツダ真空管 (高周波増幅用)	UY-224	ラジオ用真空管、サックなし
11	8	88010673	真空管	東京芝浦電気	昭和前期	11.5×4.0	マツダ真空管 (周波数変換用七極管)	Ut-2B7	ラジオ用真空管Ut-2A7のサック入り
12	8	88010674	真空管		昭和前期	11.0×4.0	マツダ真空管 (整流用双二極管)	KX-80	ラジオ用真空管
13	9	88010031	ラジオ	東京芝浦電気	[1956年]	15.5×30.0×16.2	マツダピアノラジオ	5BA-50	プリセットボタン選局式
14	10	88010037	トランジスタラジオ	東京芝浦電気	[1965年]	18.0×23.0			球形。ハンド付。
15	11	88010039	レコーダブレイヤー	日本ビクター蓄音機	[1940年]	34.0×37.5×23.0			
16	12,13,64	88010038	ラジオ付電蓄	日本ビクター蓄音機	[1940年]	37.0×57.5×91.0		JT-6	50年史p.637
17	14	88010042	白黒テレビ	東京芝浦電気	[1953～4年]	54.0×52.0×45.5		141B	
18		88010043	白黒テレビ	東京芝浦電気	[1953～4年]	53.0×42.0×45.0		141B	
(2) 電気扇風機									
19	15	88010608	電気扇風機	General Electric	1901年	28.0×33.0×45.0			芝浦製作所初期量産型製品の手本となった製品
20	16	88010606	電気扇風機	川崎造船所	[1930年]	25.0×35.0×45.0			オルビットファン(首振り扇)
21	17	88000605	電気扇風機	芝浦製作所	昭和初期～中期	25.0×35.0×45.0		C-7067	高能率型。
22	18	88010607	電気扇風機	芝浦製作所	昭和初期～中期	25.0×35.0×45.0		C-7067	16と同型
(3) 電気ストーブ									
23	19	88010044	電気ストーブ	芝浦マツダ工業	昭和前期	42.0×35.0×40.0		ST-1KW	箱入り。未使用。
24	20	88010045	電気ストーブ	芝浦製作所	昭和前期	27.0×31.0×53.0		RH-22A	反射式。
25		88010046	電気ストーブ	芝浦製作所	昭和前期	27.0×31.0×53.0		RH-22A	25と同型

No.	写真	資料番号	資料名	メーカー	時代年代	法量	商品名	シリアルNo.	備考
26		88010047	電気ストーブ	芝浦製作所	昭和前期	27.0×31.0×53.0		RH-22A	25と同型
27	21.22	88010048	電気ストーブ	Knapp Monarch	昭和前期	19.0×56.0×50.0	Fin-radiation Heater		サーモスタット付
28	23	88010049	電気ストーブ	芝浦製作所	昭和前期	21.0×38.0×40.5		SK	アールデコ風デザイン。未使用。
29		88010050	電気ストーブ	芝浦製作所	昭和前期	21.0×38.0×40.5		SK	30と同型。
30		88010051	電気ストーブ	芝浦製作所	昭和前期	21.0×38.0×40.5		SK	30と同型。
31	24	88010052	電気ストーブ	芝浦製作所	昭和前期	16.5×64.5×39.5		SG	
32		88010053	電気ストーブ	芝浦製作所	昭和前期	16.5×64.5×39.5		SG	32と同型
33	25	88010054	電気ストーブ	芝浦製作所	昭和前期	20.5×48.5×50.5		RH-14	
(4) 電熱機器									
34	26.68	88010040	電気アイロン	芝浦マツダ工業	昭和前期	17.0×10.0×14.5		FIB	4ボンド300W。包装紙付
35	27.65	88010041	電気アイロン	芝浦マツダ工業	昭和前期	21.0×12.0×17.0		FIB	6ボンド500W。説明書付
36		88010609	電気七輪	芝浦マツダ工業	昭和前期	24.0×9.5		DSA	
37	28.66.67	88010611	電気七輪	芝浦マツダ工業	昭和前期	24.0×9.8		DSA	説明書付
38	29	88010612	電気七輪	帝国連合電球	昭和前期	24.0×12.0		R-50	
39		88010613	万能七輪	キシマ電熱器	昭和前期	35.0×26.0×7.0			
40	30	88010614	万能七輪	キシマ電熱器	昭和前期	35.0×26.0×7.0			40と同型
41	30	88010610	電気コンロ	東京芝浦電気	昭和20年	19.0×10.0			
42	31	88010723	電気足温器	オクダ電熱器製造所	昭和前期	35.0×29.4×9.0			
43		88010724	電気足温器	オクダ電熱器製造所	昭和前期	35.0×29.4×9.0			44と同型
(5) 照明器具									
44	32	88010061	デザインスタンド	東京電気	昭和前期	10.0×22.5×33.5			卓上衝立
45		88010066	電気スタンド		昭和前期	40.0×55.0			卓上用。部品不足
46		88010618	電気スタンド用笠		昭和前期	22.0×35.0×24.0			
47	33	88010619	電気スタンド	東京電気	昭和前期	28.0×50.0			卓上用。
48	34	88010064	電気スタンド		昭和前期	14.0×30.0			卓上用。
49	35	88010617	蛍光灯スタンド	東京芝浦電気	[1941年]	24.0×52.0×49.0	マツダ蛍光ランプスタンド		卓上用。
50	36	88010765	電気スタンド		昭和前期	39.0×151.0			
51	37	88010681	照明付鏡台	[東京芝浦電気]	昭和前期	32.0×65.0×157.0			山口邸洗面所の鏡にも同様の照明器具設置。
52	38	88010068	家紋入り照明具	東京芝浦電気	昭和前期	16.5×49.0			
54	39	88010616	照明具		昭和前期	20.0×29.0			
55	40.50	88010057	照明具	東京芝浦電気	昭和前期	23.0×16.0			
56	41	88010059	照明具	東京芝浦電気	昭和前期	20.0×22.2			
57		88010060	照明具	東京芝浦電気	昭和前期	20.0×22.2			56と同型

No.	写真	資料番号	資料名	メーカー	時代年代	法量	商品名	シリアルNo.	備考
58		88010766	照明具	東京芝浦電気	昭和前期	25.0×17.0	トロヂヤリC型		50年史p.357
59		88010624	照明具	東京芝浦電気	昭和前期	22.0×14.0	ファミリヤ		50年史p.357
60		88010062	電灯笠	東京電気	昭和前期	30.5×10.0			金属製
61		88010063	電灯笠	東京電気	昭和前期	30.5×10.0			60と同型
62		88010065	電灯笠		昭和前期	23.0×16.0			六面体
63		88010058	電灯笠		昭和前期～中期	18.0×18.0			ガラス製
64		88010615	電灯笠		昭和前期～中期	18.0×18.0			63と同型
65		88010067	電灯笠		昭和前期～中期	17.0×20.0			
66		88010767	電灯笠		昭和前期～中期	10.0×9.0			
67		88010768	電灯笠		昭和前期～中期	10.0×9.0			
68		88010769	電灯笠		昭和前期～中期	10.0×9.0			67と同型
69		88010770	電灯笠		昭和前期～中期	10.0×9.0			67と同型
70		88010621	蛍光灯+ホロー笠	マツダ	昭和中期～後期	45.0×23.0			
71		88010622	蛍光灯+ホロー笠	マツダ	昭和中期～後期	45.0×23.0			70と同型
72		88010623	蛍光灯+ホロー笠	マツダ	昭和中期～後期	45.0×23.0			70と同型
73		88010620	電球	東京電気	昭和前期	19.0×12.0	バイタライトランプ		100-500W ケース入り
74		88010632	電球	東京芝浦電気	1943年～45年	11.5×8.5			タンダステンコイル織状電球1943-45年使用のロゴ100V40W 無地ケース入り
75		88010669	電球	東京芝浦電気	1943年～45年	15.0×7.0			タンダステンコイル織状電球1943-45年使用のロゴ(100V100W) 碍子ホルダー及びスイッチ部品が付属
76		88010675 ～88010676	電球	東京芝浦電気	1943年～45年	12.0×7.0			76と同型 100V100W無地ケース付
77		88010677	電球	大和電球製作所	昭和中期～後期	11.5×6.0	ダイワ瓦斯入		タンダステンコイル織状電球(つや消し) 100V60W
78		88010678	電球	東京芝浦電気	昭和中期～後期	10.0×5.5	東芝マツダ		タンダステンコイル織状電球(つや消し) 100V5W
79		88010679	電球	松下電器工業	昭和中期～後期	12.0×7.0	ナシヨナル二番コイル		タンダステンコイル織状電球(つや消し) 100V100W
(6) その他									
80		88010073	イー蒸熱電気治療器	イー商会	昭和前期	19.0×29.0×23.0			
81		88010074	赤外線治療器	東京電気	昭和前期	32.0×38.0×58.0			
82		88010055	電気精算機	TEC (東京電気)	1927年	17.0×12.0×11.0		I-3	電気計器検定合格書

No.	写真	資料番号	資料名	メーカー	時代年代	法量	商品名	シリアルNo.	備考
83	55	88010056	電話台	日本電気	昭和前期～中期	15.0×16.5×16.0			
84	56	88010267	電気置時計	芝浦マツダ工業	昭和前期	9.3×26.5×20.2	セレクトスイッチ時計	S850	
85	57	88010604	電気ポリッシャー	松下電器工業	昭和中期～後期	115		MP-1	床磨き用具
86	58	88010072	マツダ乾電池	東京芝浦電気	大正～昭和前期	3.2×4.5×7.8	灯火6号マツダ乾電池		
87	59	88010680	岡田乾電池	岡田電気商会	大正～昭和前期	8.0×6.5×5.0	灯火5号携帯用		
88	60	88010625	懐中電灯		昭和前期	8.0×6.0×2.0			
89	60	88010626	懐中電灯		昭和前期	9.0×6.0×3.0			
90	61	88010627	手提型懐中電灯	マツダ	昭和前期	21.0×7.0×6.0			自転車兼用
91	62	88010628	手提型懐中電灯	ナショナル	昭和前期	21.0×7.0×8.0			自転車兼用
(7) 文献類									
92		88450034	東京電気株式会社五十年史	東京芝浦電気株式会社	昭和15年12月30日				
	50	88450034-1	電灯笠各種						p.357
	51	88450034-2	製品各種（扇風機、冷蔵庫、アイロン、電動マッサージ機、電動ポンプ）						p.417
	63	88450034-3	サイモホンA型でラジオを聞く後藤新平（東京放送局初代総裁）、初期のラジオ各種						p.446
93	64	88450034-4	ビクター製品各種（テレビ、ラジオ付電番、卓上型電番、真空管ラジオ）						p.672
		88450101	電気博覧会誌	電気博覧会誌編集部	大正7年8月18日				
94		88450106	日本電力株式会社事業概観黒部峡谷	日本電力株式会社	大正15年6月10日				
95		88450107	桂川電力株式会社水力電気工事	桂川電力株式会社	大正2年12月20日				
96		88450301	日本燈火史	東京電気株式会社	大正6年12月20日				

山口コレクション 家電製品等写真



【写真1】 88010033



【写真2】 88010034



【写真3】 88010029



【写真4】 88010036



【写真5】 88010030



【写真6】 88010032



【写真7】 88010035



【写真8】 88010670 ~ 74



【写真9】 88010031



【写真10】 88010037



【写真11】 88010039



【写真12】 88010038-1



【写真13】 88010038-2



【写真14】 88010042



【写真15】 88010608



【写真16】 88010606



【写真17】 88010605



【写真18】 88010607



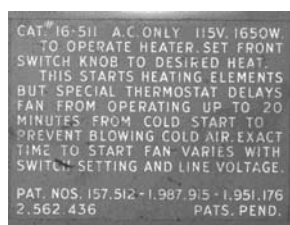
【写真19】 88010044



【写真20】 88010045



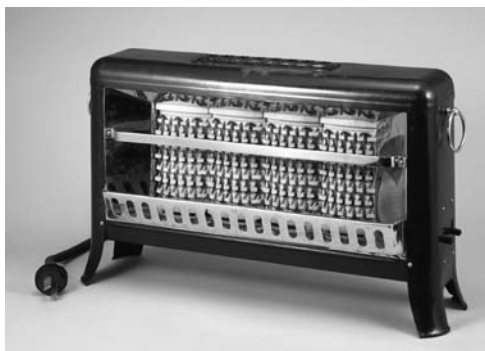
【写真21】 88010048-1



【写真22】 88010048-2



【写真23】 88010049



【写真24】 88010052



【写真25】 88010054



【写真26】 88010040



【写真27】 88010041



【写真28】 88010611



【写真29】 88010612



【写真30】 88010610・88010614



【写真31】 88010723



【写真32】 88010061



【写真33】 88010619



【写真34】 88010064



【写真35】 88010617



【写真36】 88010765



【写真37】 88010681



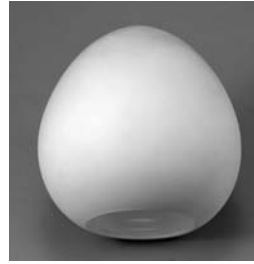
【写真38】 88010068



【写真39】 88010616



【写真40】 88010057



【写真41】 88010059



【写真42】 88010624



【写真43】 88010062



【写真44】 88010065



【写真45】 88010058



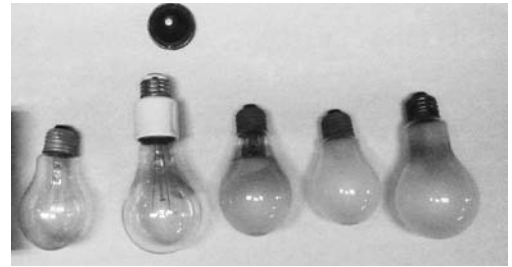
【写真46】 88010767



【写真47】 88010621



【写真48】 88010620



【写真49】 88010632・88010669・88010677
88010678・88010679



【写真50】 88450034-1



【写真51】 88450034-2



【写真52】 88010073



【写真53】 88010074



【写真54】 88010055



【写真55】 88010056



【写真56】 88010267



【写真57】 88010604



【写真58】 8801002



【写真59】 88010680



【写真60】 88010625 ~ 26



【写真61】 88010627



【写真62】 88010628



【写真63】 88450034-3



【写真64】 88450034-4

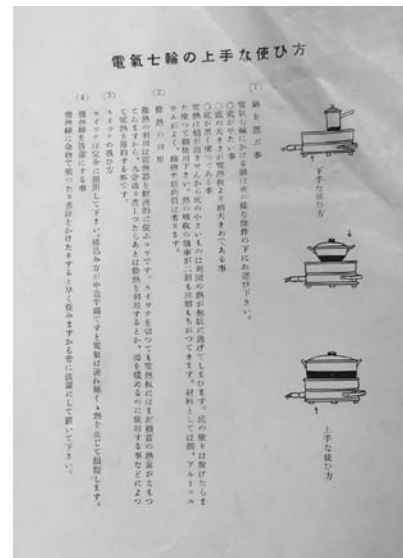
※参考資料



【写真65】 88010041附属品



【写真66】 88010611の附属品表面



【写真67】 同裏面



【写真68】 88010040附属品

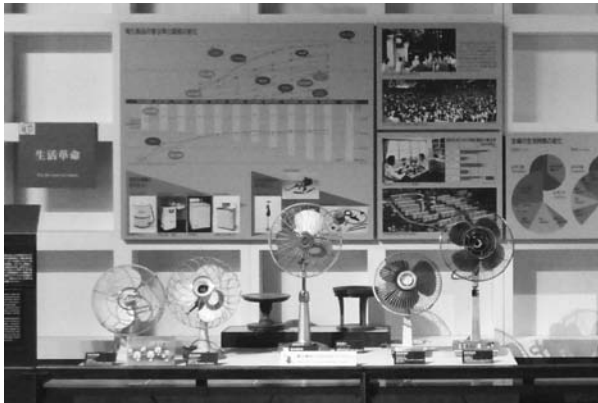


【写真69】 88010632 ~ 69、88010675 ~ 76の口ゴ

【表3】電化生活リスト

No.	資料番号	資料名(商品名)	シリアルNo	メーカー	製造年代	法量	備考	入手先
(1) テレビ								
1	*01002633	白黒テレビ		協立電波精器	1953年	67.5×70.5×105.5	テレビ本放送開始年の製品。	中山美都
2	97000952	白黒テレビ		DOMOTE	[1951-52年]	50.7×59.6×92.0	テレビ本放送開始以前の製品。アンテナ付属	三井八郎右衛門 相続人代表高實 (購入)
3	92202380	テレビ型ラジオ (シャープシネマスパーバ)	5S-85	早川電機工業	1956年	23.5×27.0×27.0	当時のテレビとそっくりのデザイン。	万仲恵美子
4	90007760	トランジスタテレビ	TR-10A	松下電器産業	1964年頃	18.6×25.0×26.6	第一号は1960年、ソニーが世界で初めて発売。	
5	94004062	カラーテレビ	6CT-338	三菱電機	1965年	48.0×42.5×53.7	トリネスコプ型(カラーブラウン管を使わず、赤・緑・青の三色色を反射鏡に照射する)の二代目機種。初代機種(6CT-333)は1963年発売。こちらも当館で所蔵している。	東野進
6	90007500	カラーテレビ		東京芝浦電気	1964年頃	56.2×78.6×88.8		万仲恵美子
(2) 電気洗濯機								
1	*03000619	攪拌式電気洗濯機		東京芝浦電気	1954年	45.0×57.4	攪拌式の国産小型第一号は1953年同社が発売。	松本勇
2	*03000845	攪拌式電気洗濯機	TA-1A	日立製作所	1954年	46.5×60.0		川上奎子
3	96000910	噴流式電気洗濯機	VJ-3	東京芝浦電気	1955年	42.0×47.0×85.5	日本初のタイムスイッチ付。付属の絞り機を使う際、上部の蓋を逆さにして脇に取り付け、洗濯物を受けられる。噴流式の国産第一号は1953年、三洋電機が発売。	森山巽
4	94200745	噴流式電気洗濯機 (クミアイ電気洗濯機900型)	9-253	早川電機工業	[昭和30年代]	43.0×48.0×90.5	絞り機付。	(購入)
5	93008701	全自動電気洗濯機(青空)	PF-1800	日立製作所	1973年	53.0×52.5×95.5		鈴木隆介
6	99002389	電気洗濯機用洗剤 (ライオン粉石鹸)		ライオン油脂	1953年	23.8×31.2		川上香
(3) 電気冷蔵庫								
1	91009683	電気冷蔵庫		松下電器産業	1957年	58.4×48.5×92.4	1959年～1991年、川崎市麻生台団地で使用。	荒井アイ
2	92001833	電気冷蔵庫	NR-740	松下電器産業	1957年	55.0×57.0×112.0	昭和30年代から1992年まで使用。	木下秀明
3	93007778	電気冷蔵庫	GR-830	東京芝浦電気	1959年	100.2	1959年～1974年、神戸市御影の宮の前住宅で使用。生協スーパーマーケットで購入した牛乳・豆腐を入れた。	三木秀雄
4	96000911	電気冷蔵庫	CR-90DA	東京芝浦電気	1959年	65.0×55.0×106.0		森山巽
5	95010847	電気冷蔵庫		ゼネラルモーターズ	昭和中期	82.0×70.0×177.0		西川知恵子
(4) その他								
1	91001636	自動式電気釜	ER-5	東京芝浦電気	1955年	28.6×35.0×29.0	国産第一号製品。	秋山昌之
2	91005441	電気トースター	TT-1	東京芝浦電気	1955年	11.5×22.3×17.2		鈴木千代子
3	91005444	電気フライパン	FG-602	東京芝浦電気	1956年	39.7×23.0×15.0		鈴木千代子
4	91001604	電気ゆで卵器	BC-301	東京芝浦電気	1960年	14.0×17.0	卵型のデザイン。	秋山昌之
5	87000056	ジュースカー	JC-15K	東京芝浦電気	[昭和30年代]	16.1×24.0		中村忠一
6	92004565	電動ポリッシュャー	TC-241	三菱電機	[昭和30年代]	39.4×17.5×22.7		諸井三佐保
7	90017086	スプレオ	SE-1400	松下電器産業	[昭和30年代]	42.0×99.5×78.5		万仲恵美子
8	95011331	電気扇風機		三菱電機	1952年	24.0×35.0×47.0	カラー。台部分流線型。	東京医科大学

「電化生活」コーナー 特集展示例



【写真70】戦後の扇風機特集（2011年夏）



【写真71】テレビ特集（2011年秋）①初期のテレビ等



【写真72】テレビ特集② カラーテレビ



【写真73】テレビ特集③ 各社テレビチラシ等